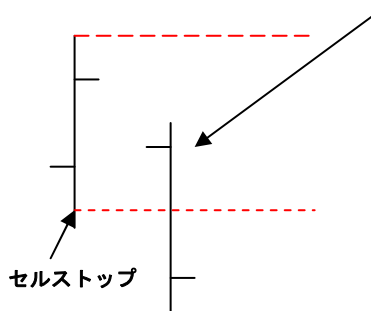


短期チャートパターン II

TD TRAP

TD TRAPとは、「捕らわれた始値」という意味である。

① TD TRAP 売り反転

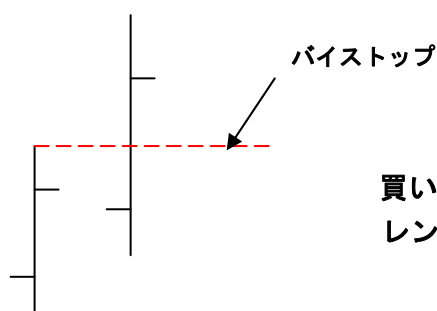


始値は、前日のレンジ内から始まる。TD TRAPはギャップが無いという意味で、TD OPENないしはウップスと対照的なフォーメーションといえる。

ポイントは、前日のレンジである。レンジを突破したところが、売買のポイントとなる。実務上は、ストップを置く形でのポジション・メイクとなる。

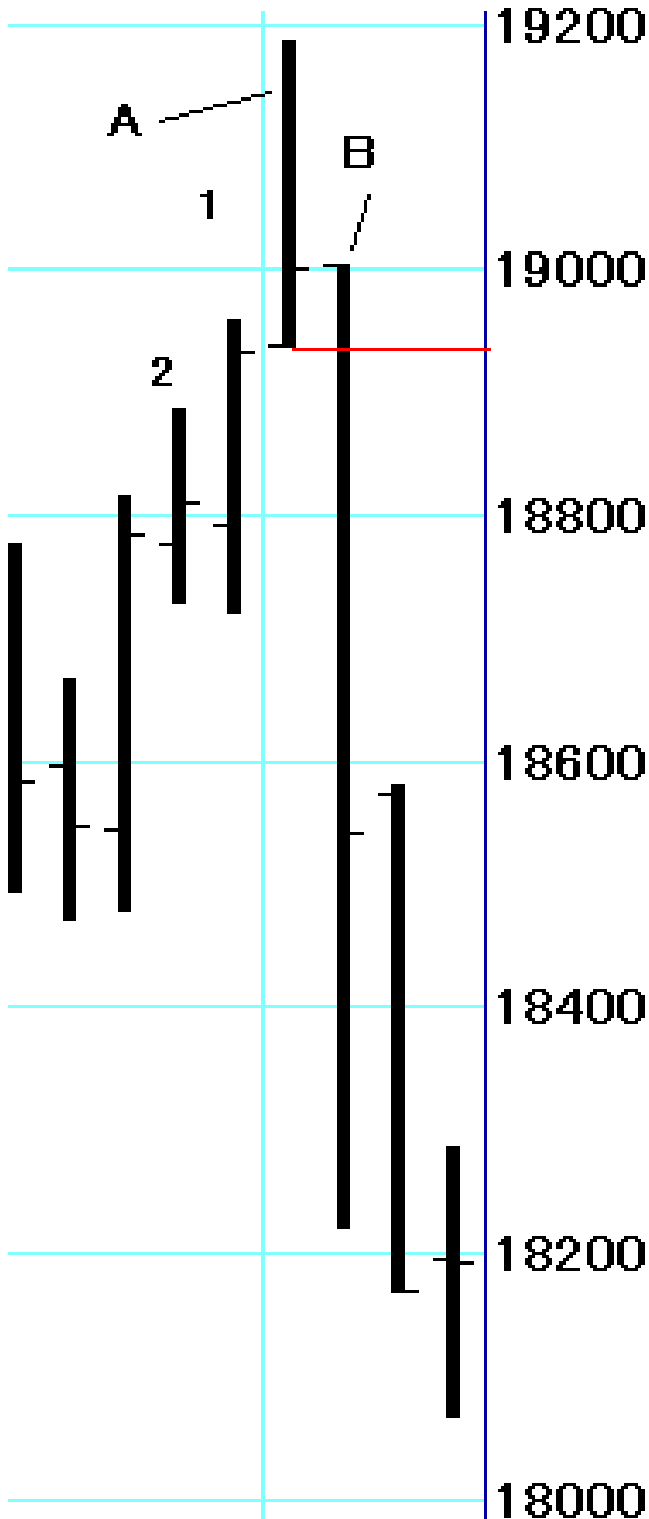
つまり、デイトレードのなかでは、ウップスと対照的に極めて順バリエーションなシステム、と考えられる。

② TD TRAP 買い反転



買い反転も前日のレンジの中に始値があり、前日のレンジを抜けたところがストップバイイングとなる。

<TD TRAPの実例—日経225 現物>



実例で紹介するのがわかりやすいであろう。
(2000年1月の日経平均)

AのバーとBのバーを比較してほしい。
Bの始値はAのレンジ内から始まっている。
その後Aの安値 18937 をブレイクし、TD TRAP ダウンサイドリバーサル成立 (すなわち売りシグナル) となった。

翌日もTD TRAPが成立しているが、
BのバーがWS7であったことを考えると、
ブレイクアウト戦略の一つであるTD TRAPを仕掛けるのはやや危険と云える。
実際、大引けベースでは何とか収益になったものの、バйлアウト (翌日の始値まで持ち越し) をおこなうと、損益は殆ど期待できない。

若干復習めいたことを言えば、2 (Aのバーの2本前) はNR4であるから、1におけるTD TRAPはおそらく、ONでポジションを持ち越せたであろう。

Aのバーも、1に対してTD TRAPを成立させている。ただし、1のバーは、2に対して「高く引けたアウトサイドディ」であり、注意が必要であった。結局、Aは行ってこいであったから、短期トレーダーの細やかな相場観察が、功を奏した、ということが出来よう。

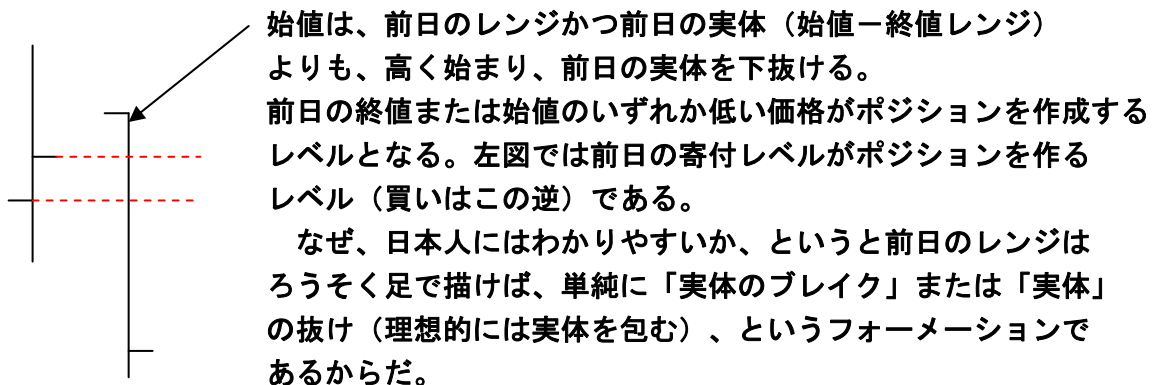
さて、ここまで読んだ方はおそらくすでにおわかりと思うが、実はこのTD TRAPはリダ・ブラットフォード・ラシキの「値幅収縮」戦略のIDやNR4の条件を取り去った極めてシンプルなものと考えることが出来る。

<2>

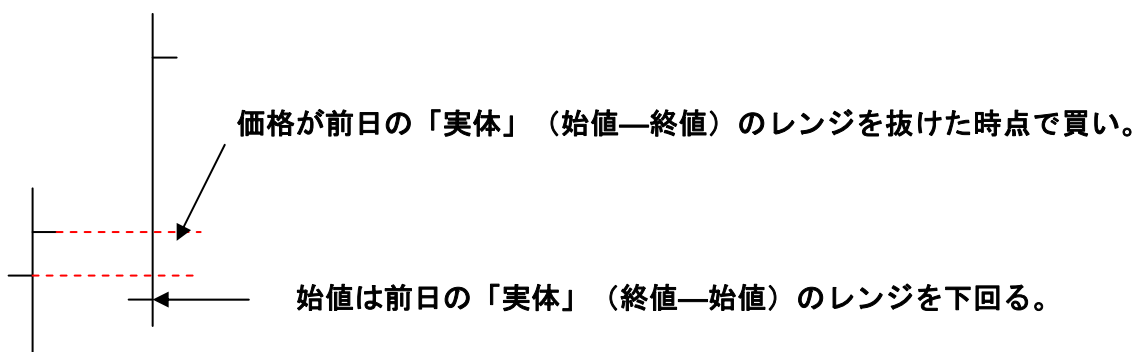
TD CLOP

TD TRAPに更なる条件が付くパターンである。
欧米人よりも、概念としてはわかりやすいかもしれない。

① TD CLOP DOWN

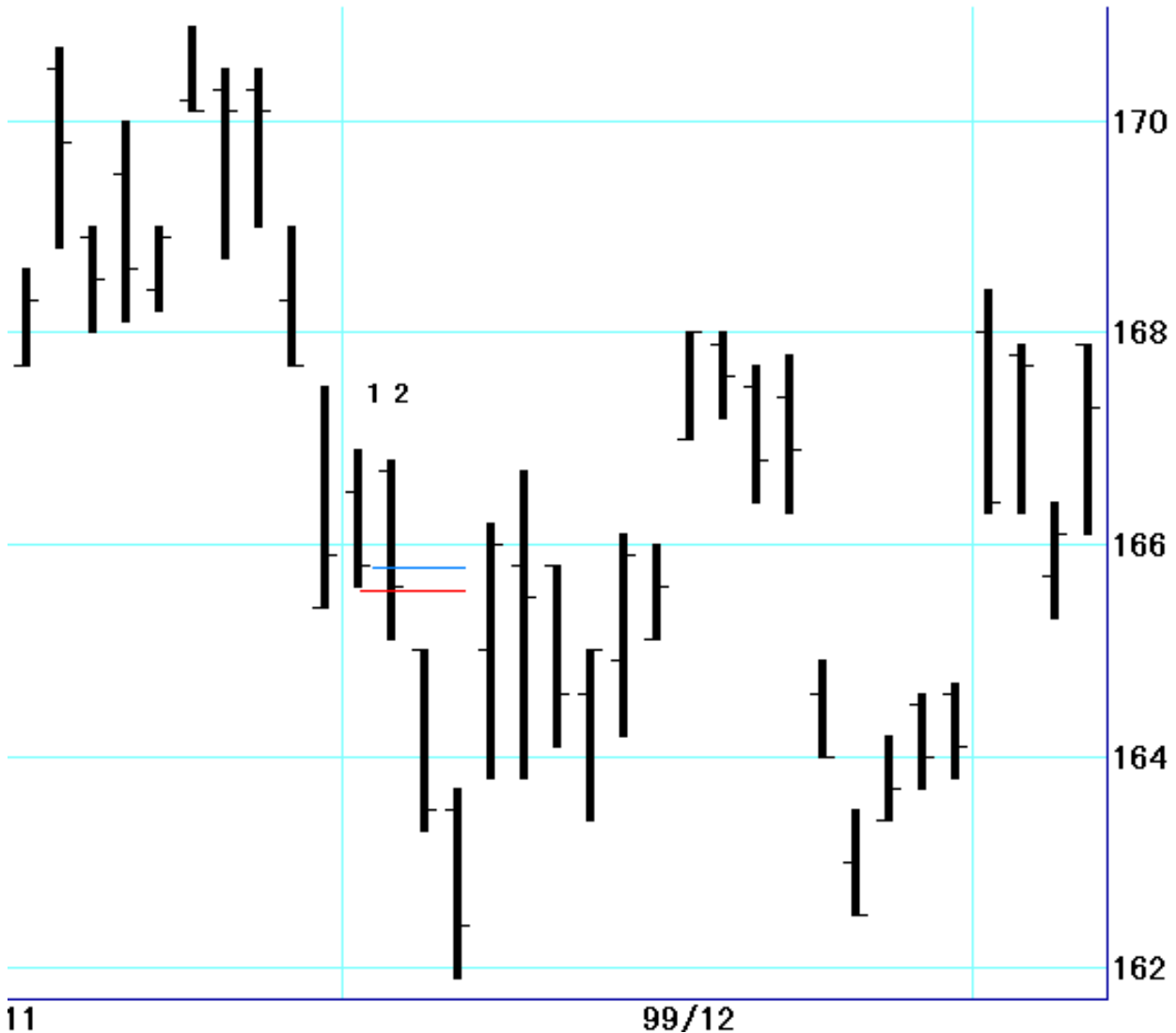


② TD CLOP UP



<3>

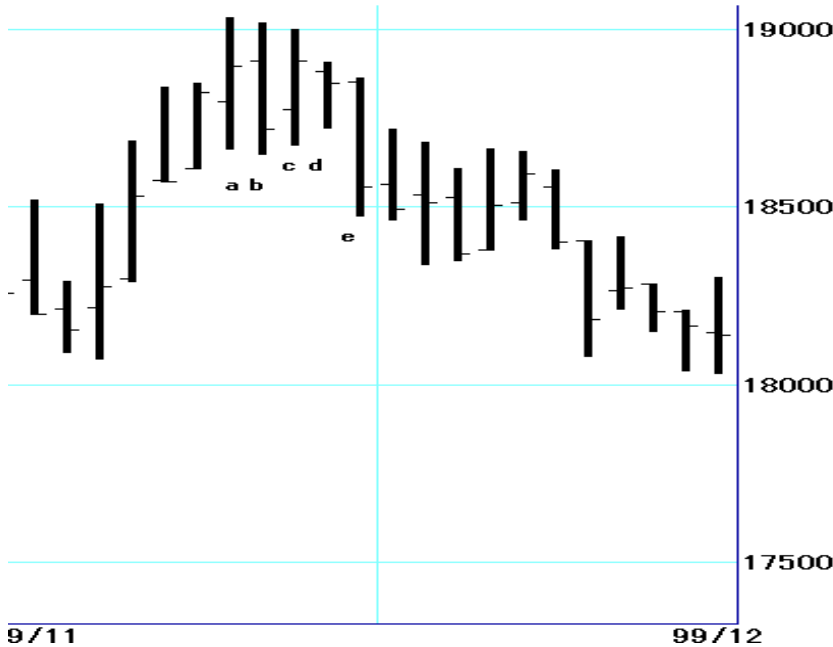
<TD CLOPの実例① 東京銀 先物つなぎ足>



1, 2のバーにおいて、TD CLOP DOWNが成立している。すなわち、1の実体より、2の始め値は高く、レンジは1の実体を突き破っている。従って、フォーメーションを知っていれば、1の終値（青い線）が参入価格である。さらにTD TRAPが同時に成立しているが、その場合、参入価格は前日のレンジ下限（安値）となるので、赤い線まで待たねばならない。

<4>

<TD CLOPの実例② 日経平均>



99年11月の日経平均相場の中勢天井で検証してみよう。

aのバーに対して、bのバーがTD CLOP（売りシグナル）となっている。

なお、翌日以降IDが続き、dのバーがID/NR4、eでブレイクアウトしている。

eはTD TRAP DOWNにもなっている。

<TD CLOPの実例 ③NTT ドコモ>



1のバーは、aに対して、TD CLOPとなっている。すなわち、aの実体より低く寄付き、aの始値を上回った（同時にTD TRAPも成立していることに留意されたい）。その後、2でアップス（TD OPEN）が成立、3では孕んだものの、再び4でアップスが再点灯、ギャップを開けた暴落となった。余談となるが、天井圏において最初のアップスが失敗に終わるケースがあるが、2度目は殆どのケースで成功する。トレードに百戦百勝が存在しないように、アップスも完全無欠ではない。だからこそ、このパターンにかけ続けなければならないのであって、次のケースに仕掛けない、というのは大きな機会損失となってしまおうであろう。さて、大切なのは、5、6のバーである。実際に2、4のダブル・アップスに売り損ねても、6のバーが5に対して、TD CLOPとなっている。TD TRAPに比べ、かなり良い位置から売れている点に留意されたい。

<5>

TD TRAP、TD CLOPの検証

TD TRAP、TD CLOPの検証である。条件はTD OPENの時と全く同じ。

日経平均（現物）

TD TRAP	TD CLOP
総損益	91,885
総利益	191,228
総損失	-99,343
総トレード	1,889
勝ちトレード数	1,088
負けトレード数	801
勝率	58%
最大損失	-815
最大勝ちトレード	1,826
勝ちトレードの平均利益	176
負けトレードの平均損失	-124
買いトレード	27,034
売りトレード	64,852

単純な条件で、勝率が58-59%というのは、短期トレードにとって決して悪くない数字であると思われる。特に売りトレードにおいては強い様子が伺える。TD OPEN（ウップス）に比べ、比較的順バりに近い技法と思われたので意外感がある。そこで、比較的長い上昇トレンドにあると想定されるソニーで検証してみた。

ソニー

TD TRAP	TD CLOP
総損益	12,560
総利益	39,840
総損失	(27,280)
総トレード	1,093
勝ちトレード数	630
負けトレード数	463
勝率	58%
最大損失	(530)
最大勝ちトレード	550
勝ちトレードの平均利益	63
負けトレードの平均損失	(59)
買いトレード	1,490
売りトレード	11,070

ここでも、やはり売りトレードの方が圧倒的に損益が良い。TD TRAP、TD CLOPともに、基本的にはウップス同様、売り優位の短期フォーメーションと考えられそうである。

ドル円相場

TD TRAP		TD CLOP	
総損益	209.64	総損益	(8.20)
総利益	586.75	総利益	148.01
総損失	(377.11)	総損失	(156.21)
総トレード	1918	総トレード	599
勝ちトレード数	1027	勝ちトレード数	284
負けトレード数	891	負けトレード数	315
勝率	54%	勝率	47%
最大損失	(4.13)	最大損失	(7.28)
最大勝ちトレード	8.73	最大勝ちトレード	3.46
勝ちトレードの平均利益	0.57	勝ちトレードの平均利益	0.52
負けトレードの平均損失	(0.42)	負けトレードの平均損失	(0.50)
買いトレード	74.53	買いトレード	3.46
売りトレード	135.11	売りトレード	(7.28)

ご覧の通り、TD TRAPはドル円相場（3市場つなぎ足）としては決して悪くない勝率といえる。一方、TD CLOPに関しては勝率47%、ドロダウもTD TRAPよりも悪く、「使えないパターン」と言うことが出来る。特に、TD CLOPについては、売りトレードがトータルで損失になっている（最も最大損失と同額なので、これさえ回避できれば収支はとんとんなのだが）。

東京金

TD TRAP		TD CLOP	
総損益	71	総損益	2
総利益	191	総利益	23
総損失	(120)	総損失	(21)
総トレード	84	総トレード	13
勝ちトレード数	53	勝ちトレード数	8
負けトレード数	31	負けトレード数	5
勝率	63%	勝率	62%
最大損失	(18)	最大損失	(7)
最大勝ちトレード	11	最大勝ちトレード	5
勝ちトレードの平均利益	4	勝ちトレードの平均利益	3
負けトレードの平均損失	(4)	負けトレードの平均損失	(4)
買いトレード	43	買いトレード	3
売りトレード	28	売りトレード	(1)

検証期間が少ないのが玉に瑕であるが（1998/01/08 から2000年1月7日まで）、単純なシステムにしては勝率が高い。使えるパターンと言うことであろう。もっとも、TD CLOPについては、最大勝ちトレードが最大損失を下回っていること、売買の損益が株式のパターンの逆である

<7>

こと（株式は「売り」で取ったが、金は「買い」の方がよい）が特徴といえようか。商品については、その他細かい検証結果は省略するが、一般的にはTD TRAPの方が良いフォーメーションであり、やはり株式同様、売りが損益的にも有利であったことが伺える。

JGB

TD TRAP	TD CLOP
総損益	12.35
総利益	36.25
総損失	(23.90)
総トレード	220
勝ちトレード数	129
負けトレード数	91
勝率	59%
最大損失	(1.73)
最大勝ちトレード	1.17
勝ちトレードの平均利益	0.28
負けトレードの平均損失	(0.26)
買いトレード	5.57
売りトレード	6.78

（注 検証期間は 97/10/13~99/10/12。売買条件等はすべて同じ）

米国債先物

TD TRAP	TD CLOP
総損益	10 4/8
総利益	35 5/8
総損失	-25 1/8
総トレード	145
勝ちトレード数	87
負けトレード数	58
勝率	60%
最大損失	-2 3/8
最大勝ちトレード	1 1/8
勝ちトレードの平均利益	3/8
負けトレードの平均損失	- 3/8
買いトレード	-3 5/8
売りトレード	14 1/8

（注 検証期間は 98/10/13~99/10/08）

BUNDS

T D T R A P

T D C L O P

総損益	4.23	総損益	6.80
総利益	22.62	総利益	10.69
総損失	(18.39)	総損失	(3.89)
総トレード	156	総トレード	41
勝ちトレード数	85	勝ちトレード数	27
負けトレード数	71	負けトレード数	14
勝率	54%	勝率	66%
最大損失	(1.18)	最大損失	(0.60)
最大勝ちトレード	1.25	最大勝ちトレード	1.88
勝ちトレードの平均利益	0.27	勝ちトレードの平均利益	0.40
負けトレードの平均損失	(0.26)	負けトレードの平均損失	(0.28)
買いトレード	1.19	買いトレード	1.52
売りトレード	3.04	売りトレード	1.88

(注 検証期間は 98/10/12 から 99/10/11。)

債券相場においても、T D T R A P は十分に使用に耐えるもの、ということができそうだ。一方、T D C L O P は J G B ではマイナス、ブンズ（ドイツ長期国債）、米債ではむしろ T D T R A P より良好な結果となっている。勝率 60% 以上はなかなか魅力的であろう。

どう活用するか

T D T R A P は使えるパターンである。単純なシステムではウップス並の勝率を誇る。ドル円相場や日経平均等、効率的市場ではなかなかウップスシグナルが出ないので、それを補完する意味でも十分活用したいものだ。また、ウップスシグナルの利食いやロスカットにも使え、商品先物を利用するトレーダーにとっても価値の高いものであろう。ただし、筆者のように通貨市場を中心に見る場合、ユーロ・ポンド等の欧州通貨には殆ど使えない点、注意が必要だ。あるいは、トム・デマークがヘッジファンドのシステムを作っていた経緯から、更にその裏をかくシステムを誰かが作ってしまっているのかもしれない。債券先物に関しては、今のところその心配はなく、J G B、米国債、ブンズともに使用に耐える。

一方、T D C L O P は商品を選ぶ。一般にフォーメーションが形成される機会が少なく、どうしても必要なパターンとは思われない部分が残る。だが、T D T R A P などと併せて観察に利用したり、T D T R A P ではストップが遠すぎてマネー・マネージメント上問題があるケース等でストップのポイントとするなどの利用法が考えられよう。筆者は基本的に、T D C L O P のみでトレードするのは反対である。どうしても、というのであれば主要国の債券先物にのみとどめておくべきではないか、という感触を持っている。

<9>

(当社により検証と所見) 日経平均におけるTD TRAPはブレイクポイント+60 円での仕掛けが最適。
システムの普及により、2001 年以降に停滞したが、最近再び効果を発揮し始めている。

検証日数	5,412	1990-2013
トレード (年間平均)	1,678 76	

*指数基準は現値10,000円で算出
*PF(プロフィットファクター)=総利益 / 総損失の絶対値
*SQ日は日中立会引け決済
*DAY=日中立会引け決済 O/N=翌営業日OPEN決済
*ヒット幅は60円で最適化設定

	DAY	O/N
勝負	814	861
引分	47	47
勝率	48.5%	51.3%
現値損益合計	2,850	26,170
指数損益合計	-52	11,475
利益/1回	-0.03	6.84
年間期待値	-2	522
PF	1.00	1.15

損益合計(指数)	DAY	O/N
1990-2013	-52	11,475
2000-2013	-2,872	2,152
2008	295	785
2009	415	499
2010	133	17
2011	104	216
2012	237	145
2013	-576	548

累積損益(指数) 1990年～直近



累積損益(現値) 1990年～直近

